

【報告】

宮城県本吉郡歌津町所在魚竜館におけるリニューアルと企画展の試み

A Study Report of the Exhibition Project for the
Gyoryu-kan Museum in Miyagi prefecture

中 村 浩^{*}
Hiroshi NAKAMURA

1. はじめに

宮城県元吉郡歌津町は、県北部の南三陸国定公園に含まれる風景明媚な漁業を主たる産業とする小規模な町である。(図1)

この町には民俗資料を中心に展示保管する民族資料館と町の歴史と魚竜化石を展示する魚竜館と称する二つの博物館類似施設を有している。このうち民俗資料館は、かつての実業学校の木造校舎を利用したもので、漁業を中心とする民俗資料を収蔵し展示公開している。しかし最近ほとんど見学者がないという状況で、展示というよりも資料保管の施設として役立っている。

魚竜館は、地元の水産加工品などの紹介・販売のために設けられた水産振興施設であるとともに、国指定天然記念物ウツ魚竜化石展示保管のために、化石所在地の一つでもある現在位置に建設されたものである。従って当該施設は2棟の建物から構成されており、一つは化石の覆屋的な施設で平屋建施設である。他の一つは鉄骨2階建構造の建物であり、1階部分は、本来の漁業振興に供された歌津町の物産品の販売施設となっており、その2階が化石と歴史・民俗文化財の展示場となっている。

この施設は、平成2年11月から使用開始され、以後、現在に至るまで展示の配置を含めてほとんど当初のままで現在に至っていた。この間、入館者は平成2年11月の開館以来、数年間は増加の一途をたど

り、平成6年度には年間22,292人の最大入館者数を数えた。しかしその後は、徐々にではあるが入館者の数は減少し、平成9年度には、最高時の62%にあたる13,736人を数えるに過ぎないという状況になっていた。

その背景には、この種の施設の抱える共通の問題でもある予算的な処置が十分には出来ないということや、専門学芸担当職員の配置がないということがある。これらのために企画展示が行えない、あるいは展示などの本格的なリニューアルが難しいという状況がある。このことはかつての来館者が再度入館する魅力に乏しく、単一機会のみの入館者となる場合が多いという原因にもなる。

南三陸地域には本館のような博物館類似施設も少なく、せっきくの施設でもあり、かつ産業類似施設も兼ねていることもあって町当局としても、来館者の減少の打開策に苦慮しているというのが現状であった。

筆者は、平成8・9年度に郡・町のシンボルとでもいう田東山所在遺跡群の発掘調査の依頼を受けて鋭意調査に協力し、かつ実施してきた。¹⁾このような経緯もあり、町教育委員会生涯学習担当者から先の魚竜館の入館者減少に対応する方策についての相談を受けた。

筆者は先に行った発掘調査二年の成果を報告書としてまとめが公刊されたことで完了し、その出土

* 大谷女子大学

平成10年12月11日受理

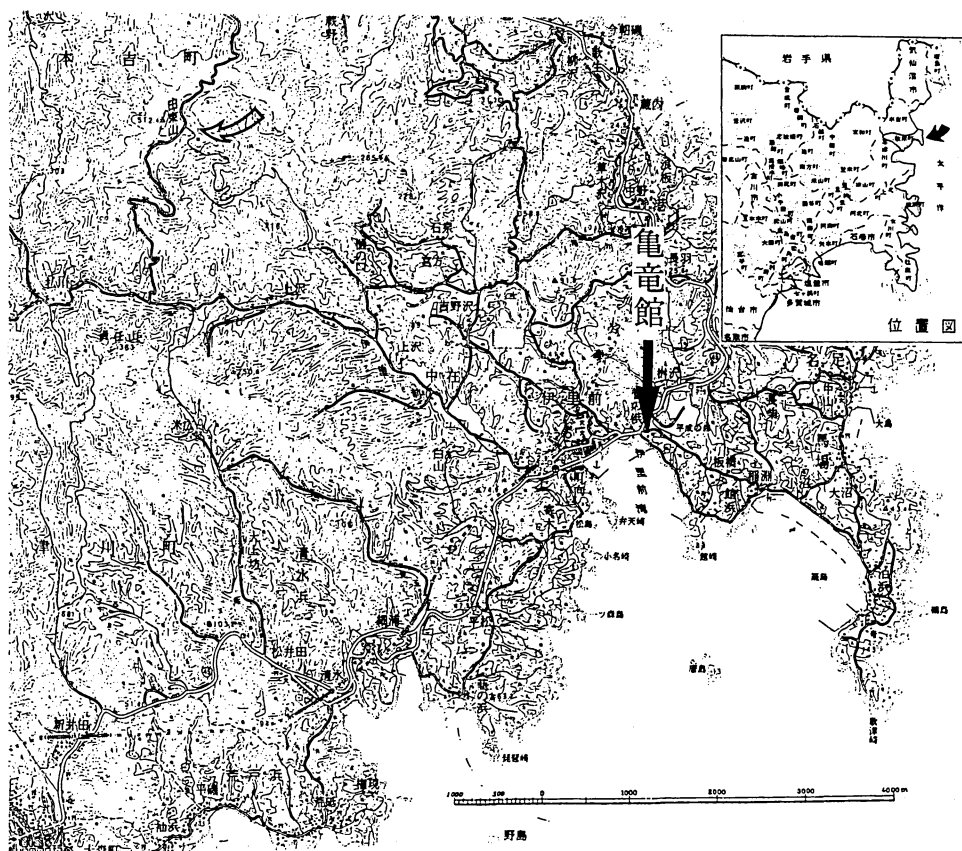


図1 位置図

遺物の町への返還も行い、個人的には漸く安堵した矢先でもあった。²⁾

相談を受けて以降、改めて館を数回訪れ、その展示の一部を子供達にも分かり易く変更すること、田束山に関する企画展示の開催を行うのがよいのではないかという提言を行った。とくに後者については、先の発掘調査の成果を展示という形で、全町民に対し報告し、かつ一般来館者に公開するという企画を提出した。やがて、その企画について町教育委員会、および町議会等の賛同・協力を得て実施に移す運びとなった。

以下、今回展示を一部変更した点と企画展示で行った手作りの展示について記述し、さらに当該展示の点検・評価を兼ねて、入館者の動向について検討を加えた。これらの各点について、大方のご教示、ご批判を得たいと思う。

2. 従来の展示のリニューアル

(1) リニューアル以前の状態

平成10年6月段階までの魚竜館の展示施設及び展示の状況は、おおよそ次の如くである。

まず展示部分は2階に設定されている。図4に示されるように、中央部を大きく壁面で区画した構造で、さすがに専門業者の展示らしく床面積の狭い展示室を二分して、効率よく利用した展示が行われている。見学者の動線は、一方通行の単純なものである。³⁾

先ず入り口を入ると中央の壁の反対側に展示台、さらに展示ケース、展示物が配置されている。

具体的な展示物は、入口から魚竜化石および関連のレプリカなどが、ケース内部と外部に平行して展示されている。壁面には、ペイントによって海中の様子を表現したと思われる絵が描かれている。これ



上：竜竜館全体 下：1階売店部分
図2 魚竜館の現状（撮影：三浦勝美氏）

らの逆の壁面には埋め込みの展示ケースと縦長の立面ケースが配置されている。前者には魚竜化石が展示され、後者には化石から復元された骨格の標本がケースの天井部分から釣り下げられている。さらに進むと横長ケースにヨーロッパで発見された化石の標本のレプリカが、発見地を示す小さな地図とともに展示されている。

いずれも特に説明板というようなものは見当たらず、化石や化石のレプリカが二重、あるいは上下に展示されている。また地図は現地のもので、現地語で記載され日本語の表示は見られない。

ところで近年、日本も化石ブームの到来ともいえる現象が見られ、福井県をはじめ各地で恐竜化石などによって町起こしをはかるところが多くなっている。とくに歌津町は魚竜化石が国指定の天然記念物に指定されており、かつ町当局も「魚竜の町、歌津」として町職員の名刺などにも刷り込んで宣伝しているところでもある。

当該施設もこの「魚竜」から名付けられたもので

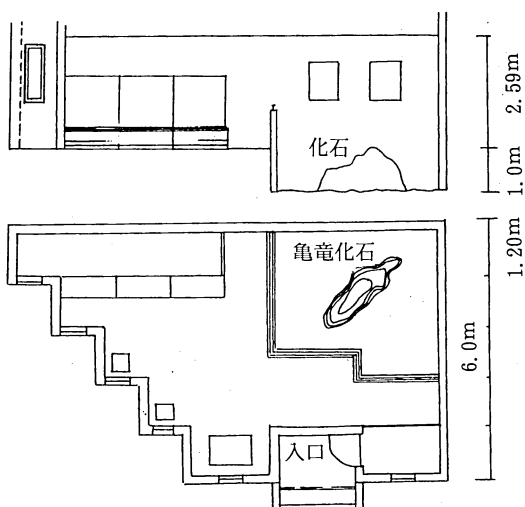


図3 魚竜化石展示館－覆屋建物

本来はその化石の保存施設であり、その展示施設でもある。したがって、魚竜化石の見学を目当てに見学者が遠方から来るということも珍しくはない。しかしそれらの一部の研究者や化石マニアはともかくとしても、大半の化石に対してアマチュアの見学者に対しては、当該施設での説明は少なからず不親切であるという指摘は否定できない。なお既に触れたように本館に隣接して化石の覆屋を行い、現地で保存展示している小型の建物もある。

しかし筆者らには、当該コーナーを云々し、その変更を企画する程の知識を持ちあわせておらず、かつ当該化石部門については、常に来町して指導されている専門家がおられることでもあり、今回はリニューアルの対象からは除外した。

これら化石の展示に続いて、「歌津町の原始」とする歴史に関する展示が始まる。まず展示ケースには、縄文土器、石器、骨格器、獣骨、魚骨などが、とくに材質や遺跡別という配列ではなく比較的雑多に配置されている。さらに展示ケースの後方には、雛壇を作り、鯨の尾の骨や石器の復元模型などが展示されている。これらの展示には、個別のネームプレートは見られず、町内の遺跡から出土したことを示すネームプレートのみが配置されている。さらに町内の遺跡の内容や現状の説明などは、全く触れられておらず、部外者には分からない状態であった。

(2) 展示の変更点

管見による限り、南三陸地域あるいは元吉郡地域での考古遺物の展示施設は本館が唯一といってもよく、当該施設での展示は、見学者や研究者などにとっても貴重なコーナーである。さらに生涯学習の場として考えた場合、子供達が町の文化財保存や郷土の歴史を学ぶ資料としても重要であり、その展示が分かり易いということが強く求められるだろう。

そこで従来「原始」の展示について、ケース内の遺物を遺跡ごと、さらに材質別の配置に変更し、かつ縄文時代という時代の特長などを記述した解説文などを追加することにした。さらに出土遺物を展示している町内遺跡の現状を写真パネルで展示し、その周知を図ることにした。とくに町内の小学校生徒の郷土の歴史を学ぶということを考慮して、できるだけ易しい表現を用いて解説パネルを作成した。あわせて縄文時代の人々の暮らしや生業について、概説的な文章も加えた。これは、『町史』や『市史』などの記述にみられるように、日本全体の歴史で、歌津町の遺跡や遺物がどのような位置にあるのかが分かるようにするためでもある。また縄文土器については、ただ平面に置いているだけでは表面の文様がよく見えないこともあり、拓本により拡大した状態のパネルにして、同じ場所に掲示して参考にした。

ケース後方に見られた竈壇の展示物について、鯨の尾骨は別の展示場所に移動した。ほかの石器の復元模型については、縄文時代の展示の生業との関連が展示された部分に移動した。とくに従来、手の届く範囲で、盗難やいたずらの可能性もあったことから、ケースの後方で比較的安全な部分に配置した。

また北方領土の土器として寄贈された土器の破片が展示されていたが、これについては適当なスペースが見当たらないということで、今回は引上げておくことにした。

最後に照明がケース内に設置されていないこともあって、十分展示物が見えるだけの照明が不足していた。この点、見学者のまぶしくない範囲で照明の方向を変更した。

3. 企画展示の準備

(1) 従来の展示

「原始」について「古代」の展示部分がある。し

かし当該町内には明らかに古代までさかのぼる遺跡は見られず、わずかに田東山経塚が出土遺跡から判断して平安時代末期とされているに過ぎない。従って当該コーナーは田東山経塚出土遺跡が展示されているということになるのが本来ではあるが、残念ながら出土遺物の大半は、県教育委員会の保管となっており、町には経塚周辺で採集された陶器の壺が1点と経塚調査当時の写真パネルが展示されているのみである。これらのうち壺は、後方のケースに納められ、パネルはその左方に2枚掲げられている。前方の横長のケースには、昭和63年から3年間行われた県教育委員会による田東山遺跡群発掘調査で出土した中世以降の古銭（多数）、懸仏（2点）、鏡（1点）が展示されている。

このコーナーでは経塚に関する図示した説明のパネルが2枚見られるが、田東山遺跡群については全く説明が行われていない。ただ田東山出土とあるのみで、それがどのような遺跡からどのような状態で出土したものかどうかは知ることができない。この状態で次の「中世」のコーナーの展示に移行する。ここでのケース内の展示は、先の部分に見られた田東山出土遺物のうち、陶磁器を少量並べているというものである。さらにケースの半分には葛西氏関連の系図文書のコピーを展示している。背面の壁には歌津12人衆とよばれる地元名士の家系系譜をパネルで説明しており、あわせて墓地の写真パネルも見られる。しかしこれらの家系が歌津町と関連あることは、明らかとなってもその功績の内容や詳細については、前後には全く触れられておらず、単にそのような系譜の一族が存在するというのみしか門外漢には分からない。

とくに当該コーナーで中世における郷土の歴史を展示し、教育に役立てるには今一つ工夫が必要のように思える部分である。

しかし、今回の展示では当該部分のリニューアルは行わないことにした。当該部分への展示は、田東山関連のものは使用する可能性があるので除外し、これら以外はすべて企画展示中は引上げ、他所で保管することにした。

このコーナーと次の展示コーナーとは、建物の構造上大きく直角に曲がっている。そこには「近世」として、伊達家支配の歌津についてのパネルと海運

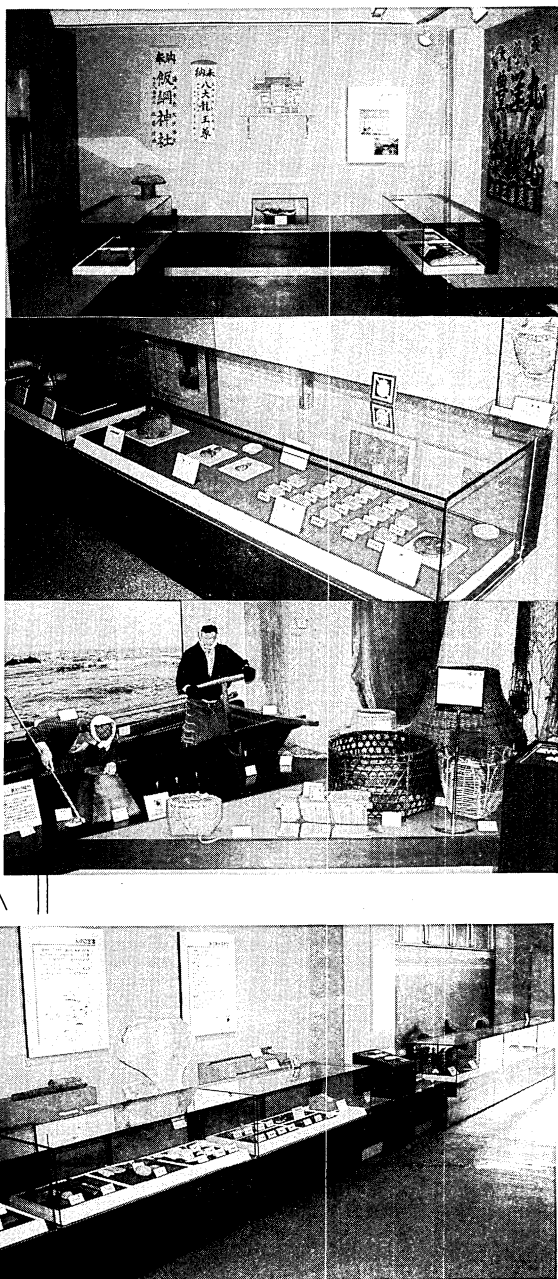
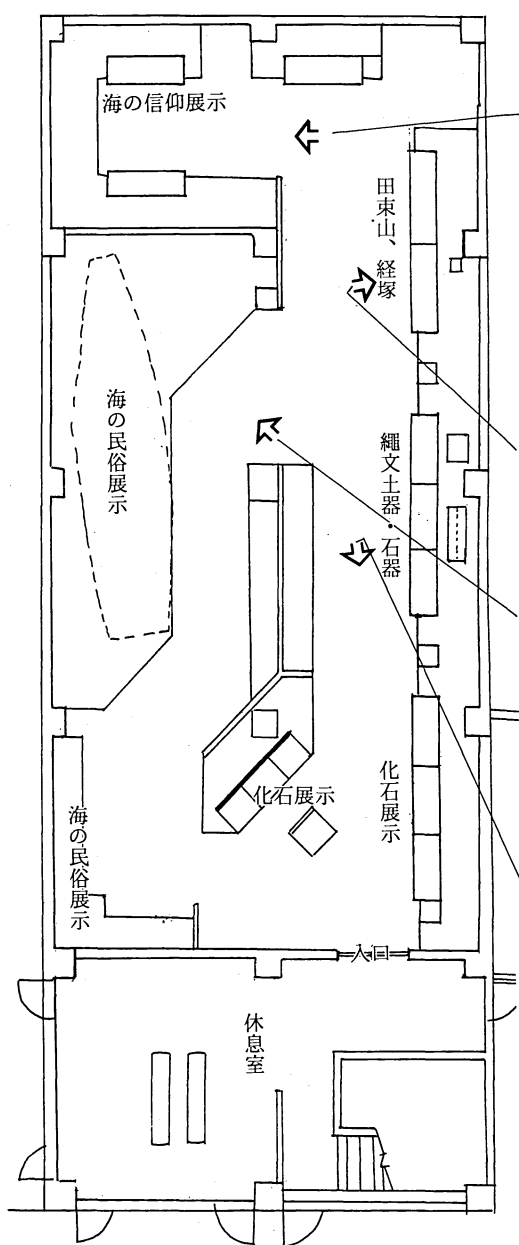


図4 企画展示前の魚竜館の展示状況（撮影：三浦勝美氏）

に関するパネルおよび展示が行われている。ケース内部には、丁銀樹と計りが各1点、その右に木製の拡声器、左側には当時の廻船問屋の大福帳（長帳）2冊が置かれている。壁面には先のパネルと当時の千石船の名前を刻んだ船名板が展示されている。ただしこの展示によって、当該歌津が沿岸交易の基地の一つとして栄えていたことが分かるのであるが、はじめて館を訪問した者には、よほどの注意を払わない限り、通り過ぎてしまうという地味な扱いとなっている。また伊達家支配に関するパネルでは、歌津との関連についての説明はほとんど見られず、わずかに当時通用した藩札の写真を拡大して貼布していたにすぎない。

このコーナーから次のコーナーには、大いに気になるほどではないが、やや空間が見られる。ケースは横長のほかの部分と同じ規格の、のぞき形態のものである。ここでは船のお守り、とくに地元の禅宗寺院の津龍院から授与された各種の航海の安全や大量を祈願するお札や民俗的なお守りが並べられている。背後壁面には大漁旗が全面に貼付されている。このコーナーは、展示台が大きく「コ」の字を描くように曲がっており、通路を三方が取り巻くような形となっている。

その中央部分の壁面中位には、神棚がしつらえてあり、その全面には、神への供え物すなわち神饌がレプリカによって作られ展示されている。しかしこれらが漁師が出漁する際に祭る方式に則っているものかあるいは正月などの特別な季節のものなのかは解説がなく分からない状態である。

この左手のコーナーも祭祀に関する展示が行われている。まず船や剣のレプリカあるいは模型を貼付した絵馬が3点、さらに龍神を描いた絵馬が展示されている。仮面のお守りも見られた。また実物大に作られた石碑や竜神信仰に伴う大きな石碑のレプリカもケースには入れられずに配置されている。

以上が、「原始」に続く、展示状態の概要であるが、当該部分について、大幅に展示を変更して今回の企画展「田東山の深奥に迫る」の展示部分として予定した。したがって、従来の展示物は、寄託品については一部所有者に返却されたり、あるいは期間中引上げることになった。また今回の展示で使用するものについても、当初の展示位置から移動させるこ

とにし、これらの行為から少しでもイメージチェンジをはかろうとした。

(2) 施設の整備

企画展示を行うに当たって、従来の施設を再検討し、比較的無駄な空間となっていた展示室前の階段との空間、ホール部分については、仕切り壁を設置し、休息室を兼ねた展示室に変更することにした。なお外光が入るガラス面には遮光シートを貼付し、紫外線のカットを試みるようにした。さらに比較的直射日光が入らない部分に展示棚を設置し、従来の展示室にあった津波災害に関する資料を展示した。

これにより観客は海岸部分を目の当たりにしながら、津波の被害の展示を見ることになる。またテレビ受像機4台とビデオ2台によって、町で製作した歌津町紹介ビデオの上映を行った。このうちの一部は、階下の販売部分でも放映されていたが、複数のテレビ画面によるビデオ放映鑑賞のほうが迫力的にも優位であった。いずれにしても規模的には狭く、休息部分が必要かどうかという議論もあったが、魚竜化石の露呈部分を含むと若干の距離もあり、結果的には利用者が多く見られ、設置が成功であったといえる。

次に民俗展示の行われている部分との間に設置されている壁面に展示台を設置することであった。これは「コ」の字に囲まれた部分から出た地域が比較的広く、展示が一方部分しか行われていないこともあり、やや無駄な壁面という印象があった部分である。

また全体的に展示ケースが少ないことがあった。とくに企画を進めていく中で、展示ケース外では、盗難をはじめごみの付着や腐食など様々な問題があることが予想された。また多くの展示物が、ほかの所蔵者からの借用品によってまかなわれねばならないという事情も考慮すると、展示ケースの増加要請は必至のものであった。さらに展示物を適正な高さに配置するということを考えれば、その高さが確保出来る展示台の新設も含めねばならないということになった。

このように企画が具体的になればなるほど、設備の整備に費用がかかることが明らかとなり、教育委員会当局には、かなりの費用負担などのご迷惑をおかけすることになった。いずれにしても自前で作成

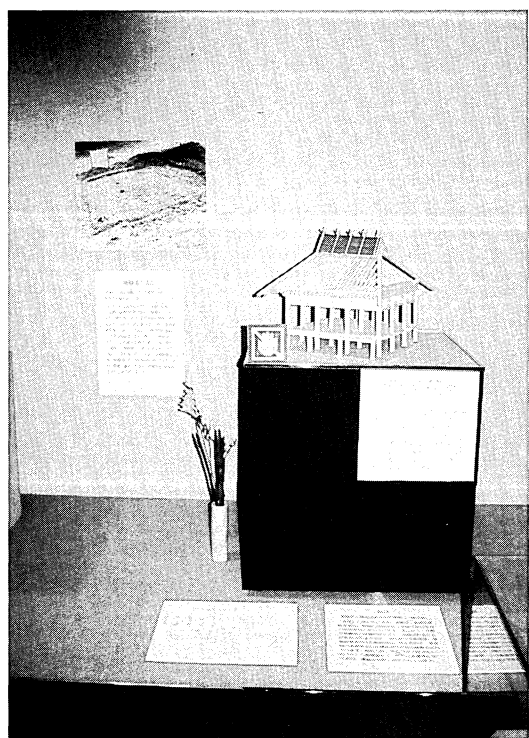


図5 復元建物模型（撮影：三浦勝美氏）

できるものについては、できるだけ費用をかけないという方針のもと、その本格的な計画が名実ともに本格的にスタートしたのは、平成10年の春のことであった。

4. 企画展示の内容と実施

企画展示の目的は、田束山遺跡群の発掘調査の成果を公開することである。その方法としては、可能な限り視覚的なものによる展示を行うことであった。展示期日は平成10年7月1日から9月30日までの3か月間とし、6月30日にはプレ展示およびテープカットを行うというものであった。

このため館自体での展示作業は、少なくとも6月28～29日の2日間現地で行うことにし、その前に何度か歌津へ足を運び、準備状況を確認し指示することにした。また展示物借用などについての事務処理は、原則として町教育委員会から手続きを行い、その指導は中村が行い、直接担当するのは町教育委員会生涯教育課主査三浦勝美氏とした。

ところで田束山遺跡群の調査での成果としては出土遺物展示が第一に思い浮かぶ。しかし残念ながらその目玉となるような遺物は少なく、わずかに鉄剣2本のみであるといっても過言ではない。検出遺構が多いのに比較して遺物の物量の少なさが目立っている。このため、少しでもビジュアルに有効な方法として、そこで発見された遺溝の復元模型の製作を行うことにした。

とはいっても建築の専門家の意見を聴取する時間的な余裕もなく、ただ基礎の柱穴からの建物の復元となった。地元及び東北地域の建物の特徴を写真や報告書によって、一定のイメージを作成し、それを10分の1ないし8分の1という縮尺にしたがって材料を求め組み立てていくという方法をとった。

この工作材料にはバルサ材を用いることにした。これは軽量で、加工が容易という利点があった。試行錯誤の連続で、実際にいくつかの復元模型を製作し、完成させて状況を見ては、問題点を洗い直し再びやり直すという日々が続いた。模型作成の詳細は本稿では省略するが、ともかく展示の期日に近い5月の連休明けまでには、ほぼ復元家屋らしき模型が完成した。

これらの外に、発掘調査で確認された遺溝でもある護摩壇あるいは護摩焚き修法に関する説明が報告書では十分理解できない可能性があった。これについても、近年の例を写真パネルによって展示するという計画は持っていたが、それ以上に興味を持たせたいという意向もあり、ジオラマの作成を行うことにした。無論、他の遺溝と異なり、縮尺まで厳密に行うことは出来ないし、またそうしたとしてもほとんど無意味と考えられた。従って護摩の修法を実施している状況のイメージが把握できるということを条件にして作成することにした。まず野外での護摩であり、あくまで中心に護摩壇を据える必要があった。これは主題が護摩という行事にあることから当然といえる。さらに護摩の周囲には近年の護摩の手法と同じく、導師となる修験者を置き、さらにその周囲には多数の修験者を配置してみた。これらは現実の行事とは厳密な意味で異なる部分もあるだろうが、一応の雰囲気は伝わるものであった。

調査で発見された建物の復元模型と遺溝の推定ジオラマの合計4点が大谷女子大学資料館で作成が、

コーナー	展示の主旨	主たる展示物
①経塚	田東山経塚への関心を深める。	経塚出土遺物の様々 経筒（レプリカ）一借用品 外容器（常滑焼）―田東山経塚出土 湖州鏡（桃型鏡、八稜鏡）一借用品 パネル―田東山経塚調査時のもの、解説（経塚）
②田東山遺跡群 1	田東山遺跡群の全体の紹介とイメージ作り	田東山の地形模型 田東山遺跡群の全体ジオラマ 田東山遺跡群のイメージジオラマ パネル―田東山の自然、田東山からの景色
③田東山遺跡群 2	田東山遺跡群の発掘調査の成果の展示	田東山遺跡群 A 地区建物復元模型 田東山遺跡群 A 地区出土土師器ほか遺物 田東山遺跡群県調査出土遺物（鏡、古銭） 参考品：円鏡（室町時代）一借用品 パネル―調査状況、解説（調査成果）
④田東山遺跡群 3 護摩の紹介	田東山遺跡群の発掘調査の成果の展示 B 地区護摩壇	護摩修法風景ジオラマ 修験道関連絵巻（護摩修法風景）一借用品 パネル―田東山遺跡群平成 9 年度 B 地区護摩壇 護摩修法風景写真、関連古文書など
⑤田東山遺跡群 4 修験道の紹介	田東山遺跡群の発掘調査の成果の展示 A 地区長堂建物、羽黒山修験道について	A 地区建物長堂復元模型 仏教系羽黒山修験道の持物など一借用品 パネル―発掘調査実測図など 解説パネル（長床建物）
⑥修験道の紹介	修験道の服装と持ち物	羽黒山修験道の服装と所持品一借用品 （マネキンに装着して展示） パネル―解説パネル（修験の服装と持物）
⑦田東山遺跡群 5	田東山遺跡群 A および C 地区出土遺物および検出建物の紹介 修験道と役行者 不動信仰	C 地区出土鉄剣と絵馬の比較 A 地区出土鉄剣 建物（不動堂）の復元模型 役行者画幅一借用品 不動明王画幅一借用品 修験道関係古文書一借用品 パネル―穴滝、蜘蛛滝の写真 解説パネル（役行者、不動明王）
ビデオコーナー	ビデオ映像による歌津町および田東山の紹介	ビデオ 2 台とテレビ 4 台で田東山登山などのビデオと観光ビデオを交互に放映する。
津波関係展示	津波の被害とその恐怖を知らせる。	津波記念碑（レプリカ）―民俗コーナーから移転パネル―海上の様子など
休息室	休息用のコーナーを兼ねる。	ソファを配置する。本来の備品である。観光案内パンフレット、ポスターの掲示

表 1 展示企画および配置

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
624	619	955	1041	3211	1730	2430	4153	1343	1185	1107	698	1434

表2 入館者数（月別）

平均（単位は人）

何とか完成したのは、展示予定の6月30日の約1か月前後であった。

これら模型やジオラマが完成することを前提にして全体の計画を行い、これらに加える参考展示物の選定を行っていた。とくに現在、歌津町には修験道に関する展示物が全くないということから、大学および近接寺院からの借用を考慮して計画を進めた。

そこで計画した展示とその内容、さらに模型やジオラマのほかにも必要とされ、リストアップされた展示物は表1のとおりである。

以上であるが、それぞれの借用資料所蔵者については突然の申し出にも関わらず、また3か月間という異常な長期間の貸与をお許し頂いた。

5. 来館者の状況

(1) 入館者数の変遷状況

さてこのように企画展示を実際に試みたものの、果たしてその展示に対して観客が如何に反応するのかというのが、重要な問題である。とくに来館者数が減少しているという現状からの脱皮を期待しての企画であり、その結果は数値として明確に表れて欲しいという願望があった。そこで開館以来の来館者数の変化と、今回の企画展示期間中の状態との比較を行い、単純に来館者数にいかにかその成果が表れるのか、あるいはそうではないのかについて検討してみた。

まず毎月の入館者数について開館以来の統計とその平均値を出してみると表2に示した如くである。

これによると、ほぼ毎年ほとんど近似する来館者数の変化が見られる。しかし、年によっては前年を大きく下回ったり、上回ったりすることがあるのも事実である。いずれにしても1～12月までの期間では8月がもっとも多く、5月、7月、6月が比較的多く、3、4、9、10、11月がやや少なく、12月から2月はもっとも少なくなるという統計結果がでている。さらに毎年の数値は同じではない。

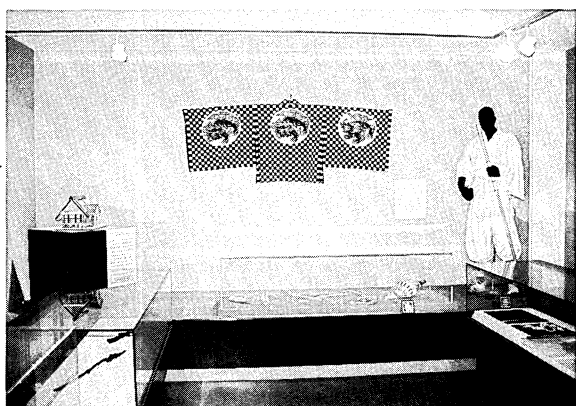
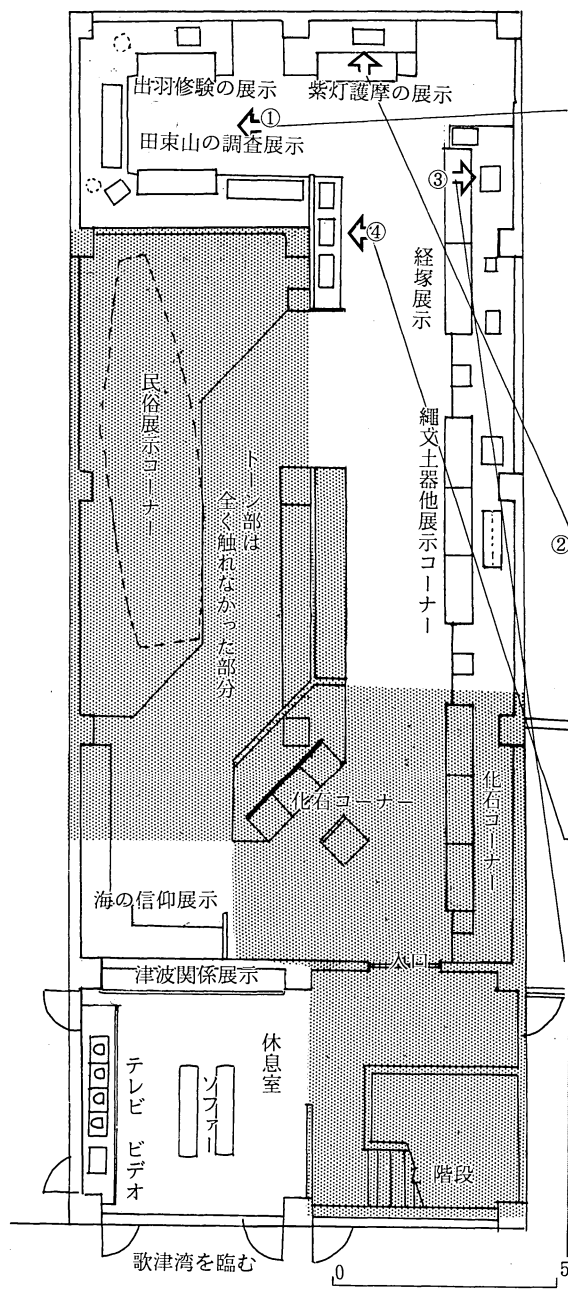
さらに図7に示したように開館した平成2年度は11月から翌年3月まで、いずれの月も平均入館者の1.2から2.4倍という数値を示している。

しかしこの数値も平成3年度の1月からは1.1倍前後と落ち込みが著しくなっている。さらに平成4年には平均入館者を上回った月が、わずかに6、10月の2か月にまで落ち込んでいる。ところが平成5、6年度には、好景気の影響もあってか、観光客の増加など様々な要因から入館者が増加し、平成6年には年間総数22,292人という最高値を数えるに至った。しかし平成7年以後は、毎年総数で2,000から4,000人を減らしており、平成9年度には3月のみが、わずかに平均入館者数を上回り、ほかの各月は平均値以下という状況まで落ち込み、その回復策に苦慮しているという状況であった。

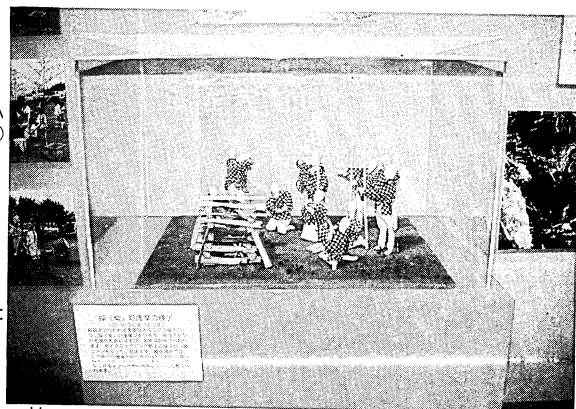
(2) 企画展示期間中の入館者数

企画展示は平成10年7月1日に9月30日までの予定期間でスタートした。しかしこの年は、当初予想しえなかったほど気候不順な日々が連続するという、観光客が集まらない条件の悪い夏となってしまった。とりわけ低温が続いた夏季には連日満員となる民宿がほとんど空室という状態で、館に近い長須浜海水浴場でも毎年の賑いは全くみられなかったという。さらに連日の天候不良は、せっかくの夏休みにも外出を、とりわけ遠出を見合わせるという状況を出現させたのである。このような自然条件あるいは外的条件が出現するとは、全く考慮に入れていなかったこともあり、当初の入館者数の予想とはかなり少なくなることが予想されたのである。いずれにせよ企画展示は予定どおりスタートしており、以後は運を天に任すほかはなかったのである。

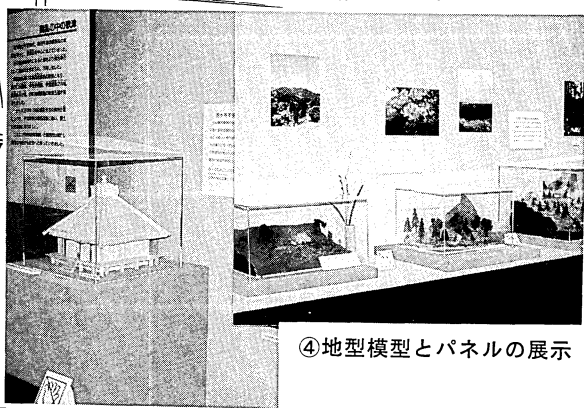
期間中の入館者数は7月2,127人ほかに無料数115人、8月は2,916人、9月は1,311人であった。この数値を平成9年度および平均入館者数と比較すると、表3の如くとなる。この表を見ると前年度比で



① 出羽修験の装束と持物などの展示



② 紫灯護摩 修法状況推定 ジオラマ



④ 地型模型とパネルの展示

③ 発掘で検出した建物跡からの推定復元模型

図6 魚竜館のケース配置と展示状況（撮影：三浦勝美氏）

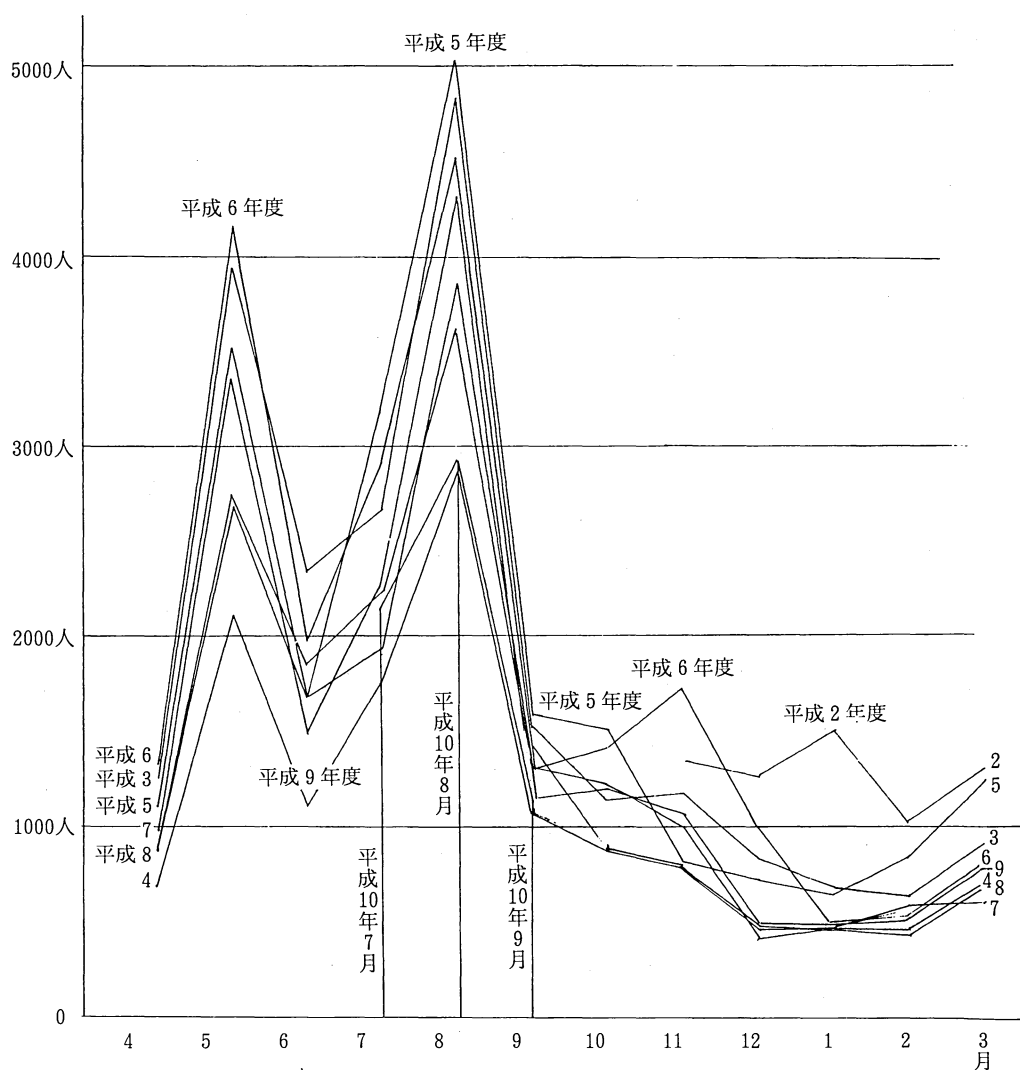


図7 入館者数変遷－平成2～10年度－（ただし平成2年度は11～3月 平成10年度は7～9月のみ）

表3 平成9、10年度および平均入館者数との対比

年度	7月	8月	9月
①平成9年度	1761	2880	1086
②平成10年度	2242	2916	1311
③全平均	2430	4153	1343
② / ①	127.3%	101.2%	120.7%
② / ③	92.2%	70.2%	97.5%
① / ③	72.4%	69.3%	80.8%

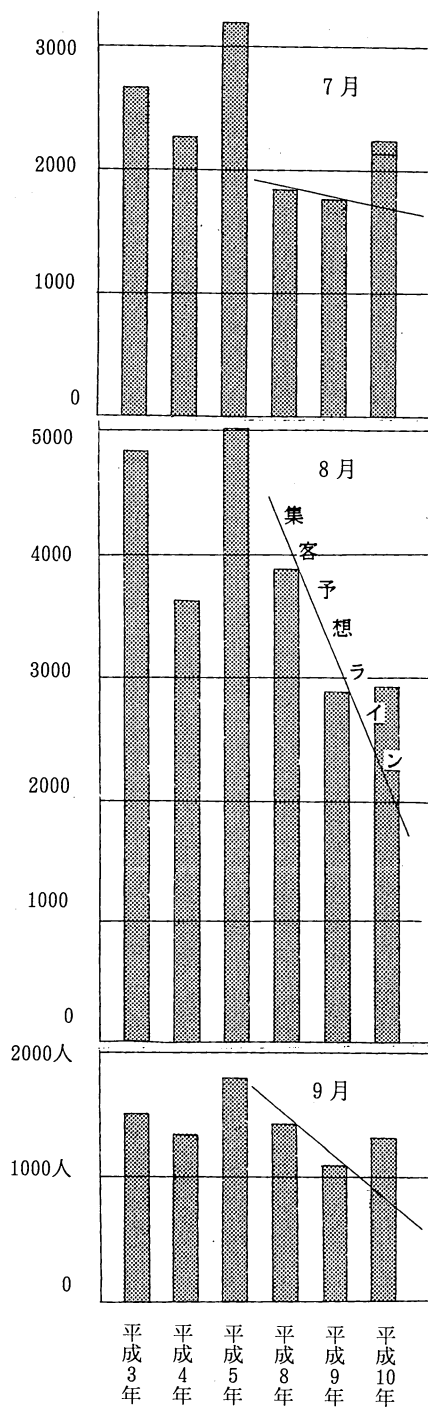


図8 7、8、9月の月間入館者数
(平成3～5, 8～10年分)

平成9年	79%	21%	7月
平成10年	80%	20%	
平成9年	77%	23%	8月
平成10年	73%	27%	
平成9年	87%	13%	9月
平成10年	94%	6%	

図9 入館者に占める大人と子供の割合

は入館者数を、ほぼ達成していることが分かる。

しかし従来の統計から算出した平均入館者数に対しては、あきらかに少ない。しかし先にあげた条件面の悪さを考慮に入れると、前年度より上向きになっている。

また図9に示したのは入館者数に占める大人と子供の数値である。これにより圧倒的に大人の比率が高いことを示している。季節によっても若干の差はあるが、この現象は、どのように見ることが出来るのだろうか。恐らく、施設の持つ固いイメージから、立ちよる意志を示したのが大人で、子供は同伴者として来館したということになるだろう。しかし後のアンケートが示すように、展示物への関心は子供たちのほうが高いことがわかる。この点、集客という観点から、子供の存在は見過ごせない問題であろう。⁴⁾

(3) 入館者の反応 —アンケートを通じて—

①アンケートの集計

今回の企画展示の実施に当たって、入館者がわからの反応を把握すべく、簡単なアンケートを配布して協力を求めた。アンケートは、一部を除いては、多岐選択方式をとっている。アンケートに回答を寄せた入館者は全体の3%前後に該当する185名分である。さらにこのうち大人が回答した、あるいはいたずらでないと見られるのは1/5以下であり、このアンケートの有効性があるのかどうかについては疑問が残る残念な状態であった。⁵⁾

しかし明らかに子供にいたずらと見られる記述を除外して集計すると、次のような結果となった。以下、設問順に見ていき、後に検討を加える。

- 1、今回の展示を何で知ったか？
- 2、今回の入館で何回目か？

- 3、展示で興味を引いた部分は？
- 4、企画展示で興味を引いた部分は？
- 5、今後の展示の希望？
- 6、交通手段
- 7、次の行先、又は行って来た観光地、施設は？
- 8、回答者の職業？
- 9、回答者の年齢？
- 10、回答者の居住地？
- 11、そのほか気付いた点について自由に記述して下さい。

以上がアンケートの質問であり、以下がその集計の結果である。以下に各設問と回答について検討をしていく。

②アンケートの分析

まず1、今回の展示を何で知ったか？では、展示の広報に何がもっとも効果的なのかを見るために設定した。その結果は、もっとも多い回答が①案内の看板、②その他、③民宿のポスター、④町施設のポスター、⑤無回答5.2%、⑥民宿の主人、⑦町職員となる。このうち案内看板は道路沿いに立てられたものでもっとも効果的であることが分かる。次にその他や無回答を除くと、ポスターの掲示が16%前後となり、民宿や職員のくちコミも7.5%になり、重要な広報手段であることが分かる。なお町内の観光施設である民宿に関連して13.5%前後の効果があつた。新聞などのマスコミでの広報は、一時的であり、大きな効果は期待できない。結論的には、看板類とポスターの貼付が効果的であるといえよう。しかし従来案内板は、道路に面して配置されており、その動員力は、既述の如く下降している。すなわちとくにこの企画展に伴い掲示されたものが効果があつたと考えられる。

2については今回の入館で何回目か？という設問である。これは①1回目が77.5%と大半を占め次いで②6回以上10.8%となる。⁶⁾ここでの設問と10の来館者の居住地との設問とから、入館者の大半が地元以外の観光客であることがわかる。すなわち近隣や地元の入館者の場合は、③2回目④3回および4回と回答しており、全体の5%前後を数えるに過ぎない。すなわちここでは当該施設への入館者の大半が地元以外の観光客であることが確認できた。逆に地元からの来館者は全体の5%すなわち約323.5人前

後の入館しかなかったということになる。

3、4、5の設問は、入館者が何に関心を示したか、あるいは何に関心を持っているか？さらに何に期待するか？を知ろうとしたものである。まず展示で興味を引いた部分は？では①魚竜化石、②縄文土器、③民俗、生活文化、④テレビ、コーナー、⑤無回答、⑥田束山、⑦海の信仰と続き、企画展示は余り興味を引かなかった様である。というよりは化石に対する関心が高いという結果が出された。とくに5の今後の展示希望では化石がもっとも多いことが、それを物語っている。当該施設が本来魚竜化石の保存顕彰という目的のために建設されたものであることから、当然といえば当然の結果であろう。規模的に人文部門と自然科学部門を合わせる総合博物館というような施設までは、到底不可能であることもあり、今後は化石専門展示施設としての活用を図るほうがよいと考えられる。

なお化石に次いでいるのが考古学関係の展示である。これらは町の歴史という自然部門とは異なる分野であり、当該施設の規模では両者の平行展示は、半端な印象を与えたりする可能性が濃いと考えられる。

4、企画展示で興味を引いた部分は？では、企画展示に絞ってその印象をたずねたものである。①発掘で出土した遺物、②地形模型、③建物模型、④修験の服装、⑤鏡および経塚の遺物、そのほかの順に関心が集まったようである。とくに模型に関心が集まった背景には、回答者が小学生が多かつたということもあろうが、パネルなどの単なる写真や図面、文章での説明より、視覚的に訴える「もの」による展示が好まれるということを示している。

6では、館までの交通手段についてたずねたものである。これに対する回答では、①自動車（自家用車）がもっとも多く②無回答、③自動車（自家用車以外）、④公共交通機関（タクシー、バス）、⑤J Rと徒歩となる。特に場所的に不便であることから、J Rと徒歩という手段が少なくなっていることは説明されるだろう。7では、次の行先、または行って来た観光地、施設は？①無回答が61.1%と過半数で、②平成の森、③海水浴、④民宿と続く。気象条件が平年並であれば、③、④の回答が増加していたと考えられる。

8から10では回答者自身について質問したものである。まず8、回答者の職業では？①小学生、②中学生、③会社員、④無回答、⑤農業（牧畜を含む）、⑥主婦、⑦教員、⑧公務員、⑨大学生、⑩漁業の順となる。9、回答者の年齢では、①10才以上20才未満、②10才未満、③20才以上30才未満、④30才以上40才未満、⑤40才以上50才未満、⑥50才以上60才未満、⑦60才以上70才未満、⑧70才以上80才未満、⑨80才以上90才未満、⑩90才以上となる。

さらに10、回答者の居住地では、①宮城県内、仙台市内、②歌津町内、③志津川町、④気仙沼、ほかに山形などが見られるが、全体としてとくに地域的な集中は①、②のほかには見られないとして過言ではない。

11の自由記述の部分では、すでに述べたように展示内容に関する意見が多く見られた。例えば、「化石展示をふやして欲しい。」「体験学習の場」、「通路に屋根を設置」、「展示施設の充実」などの建設的な提言や希望があったほかは、「すばらしい」、「勉強になった」「入館料が安い」「展示がきれい」という、一方「つまらなかった」「ケースの配置が悪い」「入館料が高い」という意見がある。

以上アンケートによる集計結果からの分析を行ってみたが、全体の入館者に比較するとわずか2.5%前後と回答を寄せられた数はかなり少なく、統計的には有意なものではないことは明らかであり、全体の声を反映していないとも思われる。しかし近年のレジャーが若年層の希望に沿って大人が実施しているという世間の状況がある。とくに今回入館の若年層の回答率が高いことを考えあわせれば、必ずしもこの結果を無視することは得策ではないだろう。

6. むすびにかえて

以上、歌津町魚竜館における企画展示の計画から実施に至る状況と、実施の経過と結果を記述し、それらについて若干の検討を加えてきた。この企画展示などが契機となって、町当局では今後とも何らかの展示計画を考えていくということであり、その展開が期待される。今回の展示を通じて、改めて観光地に所在する博物館類似施設のあり方に関して考えることが出来た。

これらの施設は、入館者が増加してはじめてその機能が果たされるのであるが、その運営や企画を担当する部署に展示に関する知識や経験を有した人材

が配置されていない場合には、その活用は十分に行われないまま放置されることになる。

ただし当該施設のように物産振興施設あるいは観光施設という性格を備えている場合には、入館者の数が問題にされることが多い。今回の場合も少なからず、集客数が大きく減少している点が先ず問題となっていたようである。どのような施設でも、開館して間もない時期には入館者は多いといえるが、一巡すると大きく減少していくのが普通である。この減少傾向をいかにして留めるかあるいは、増加させるかは、各地の施設が抱える共通の重要な問題であろう。とりわけ本年の期間中は、例年にない天候不順が続き、観光客が大幅に減少するという状況があった。この逆風の中での試みであり、当初予想した入館者数は確保出来なかったが、一定程度の成果はあったと考えている。

また当該施設のように、自然分野と人文分野の規模の小さい複合施設では、既に指摘したように入館者のとまどいが生じており問題がある。全国に所在する両分野の複合施設は多いが、いずれも総合博物館として分類されており、規模的には当該施設よりは大きい。さらに子供の入館者が少ないことと化石などに興味を持つ年齢が比較的若年層であることを考えあわせると、今後の取組みの方法次第では、その集客も可能であるということになる。

現在我が国では少子化が進んでいるが、この現象は、子供をかわいがるといふ見地から、子供に行楽地などの選択権が委ねられる可能性が高くなるということも暗示しており見過ごせない問題となるだろう。いずれにしても当該施設については、町当局の努力に期待する部分が多いが、今後は化石専門の展示施設として当該魚竜館を運営活用していくのが最良と考える。

一方、考古学はじめ歴史・民俗分野については他の場所に新たに施設を設置するのが望ましいのではないかという提言を結語としたい。

（補註）

- 1) 田東山は歌津町の名称の起源となった山で、山頂には経塚群や中世から近世の寺院建物跡群がある。また毎年自生するつつじの季節には町主催のつつじまつりも開催されている。現在、

町から林道が整備され、舗装道路で快適に山頂まで行くことができ、町では田束山開発委員会などの各種委員会を発足させ、その観光地開発などに力を入れている。

- 2) 発掘調査の成果は『田束山遺跡群発掘調査報告書』1998、歌津町教育委員会、大谷女子大学資料館として刊行。報告書は、ダイジェスト版を作成し、町内には各戸に配布した。
- 3) 魚竜館の展示は、各コーナーともに展示専門業者によって行われたとのことであるが、その詳細は明らかではない。なお館の配置図などは教育委員会生涯学習課の提供で、筆者が一部改変し製図したものである。
- 4) 入館者の集計は教育委員会生涯学習課の提供による。
- 5) アンケートは、入館者に自由に記入出来るように出入口部分に配置した。回収は同じ場所に置いた箱で行った。

- 6) アンケートの記入者の大半は、外部からの初めての入館者で町内の入館者及び再入館者の記入は、少なかった。これは、アンケート配布上の問題点でもあり今後の反省材料である。

謝 辞

最後に今回の企画展示に対して、数々のわがまをお聞き届けいただき、かつ協力を惜しまれなかった歌津町当局、教育委員会、さらに行動を共にしてご援助いただいた教育委員会清水教育長、千葉生涯教育課課長、三浦勝美主査をはじめ関係各位に対し厚く感謝する。また展示に当たって貴重な資料の借用を許された出羽三山神社藤田氏、龍泉寺、大谷女子大学資料館、東京国立博物館時枝務氏、國學院大学青木豊氏をはじめ、展示にご協力いただいた文化庁美術工芸課原田昌幸主任研究官、大谷女子大学犬木努氏に感謝するものである。